2017 年
フランス海外スタージュ報告書

フランス語教育スタージュ運営委員会編

日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館

本報告書は、2017 年 3 月 21 日〜24 日に実施された日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館主催のフランス語教育国内スタージュの修了者のうち、2017 年 8 月にフランス（ブザンソン）で実施された教員研修コース（CLA）に参加した方によるフランス海外スタージュの報告書です。

報告 1

CLA 夏季スタージュ報告書

飯田賢穂

ブザンソンの CLA（Centre de Linguistique Appliquée de Besançon）で、フランス語教員や FLE を専門とする教員を対象とした夏季スタージュが開催された。その目的は、CLA の用意したアトリエに参加して、外国語としてのフランス語を教える際の効果的な方法について animateurs とともに考え、自身の授業方法を向上させることにある。私は 8 月 14 日から 26 日にかけてのプログラムに参加した。

本報告では、私の参加したアトリエのうち、二つを紹介して参考になったことと問題点を示す。

アトリエ紹介

1. Enseigner la phonétique par le rythme et le mouvement (Régine Llorca)

これは音声学・音声合成を専門とする Régine Llorca が担当するアトリエである。ひとまとまりのフレーズの発音練習の中で単音（sons）の練習を行うことの重要性が説明された（l'organisation prosodique の重要性）。具体的には、ひとまとまりのフレーズが発音される時の「アクセントの位置」、「緩急」そして「リズム」が特に重視され、彼女はこれら三点を« un arc accentuel »というイメージを使って説明した（挿図 1）。音声合成の見地から、Llorca によれば、フレーズの発音を単音の単純な組合せと見なすことはできず、あくまでもひとまとまりのフレーズをベースにした上で個々の単音が決まる。« Arc accentuel »は基本の太鼓橋型から様々なパターンに展開され、参加者はそれにあわせて発生するアクティヴィテを行った。このとき、Llorca（彼女はダンサーでもある）が各パターンに対して振り付けをし、参加者はこの振り付けを再現しながら発音練習をした。振り付けの目的は、« arc »を身体全体で表現し、この身体的動作を支えにして発音をすることにある（声だけで発音練習をするとアクセントの位置、緩急、リズムを本人が思っているほどには表現できていない場合がしばしばある）。

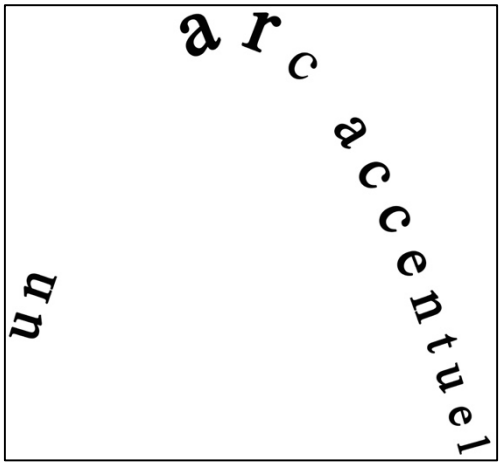

図 1 : un arc accentuel

以上のようなアクティヴィテを主軸にして、母音[i / e / ɛ / ɑ / y / ø / œ = ə / u / o / ɔ]の練習をした。このとき舌頭の位置、口の形（上下に開くか左右に拡げるか等）、唇の形をやはり身体全体を使って表現した（triangle vocalique の身体的再現）。これはフランス語とはまったく異なる口の動きをして発音される日本語を母語とする学習者にとっては効果的な練習方法であろう。

母音の発音練習を鼻母音（[ɔ̃ / ɑ̃ / ɛ̃]）の練習に展開させた。やはり動作（今回は重

いスーツケースを持ち上げる人物の動作）を伴う発音練習である（同様の練習方法がインターネット上のサイト Parlons français, c'est facile の« Les sons [ɔ̃], [ɑ̃] et [ɛ̃] »のページにある）。この鼻母音練習の後に、さらに子音の練習が続いたが、そこでは母音を下支えとして子音が発音される点が強調された。

日本語を母語とする学習者（特に débutants）を対象とする場合、Llorca のモデルをアレンジする必要があると考えられる。三点のみ指摘する。

まず arc accentuel の特徴は太鼓橋のイメージが示すようにフレーズの最後に向かって声量が小さくなる点にある。やはりフレーズ末に向かって声量が減少するという日本語の発音にしばしば見られる「クセ」と arc accentuel をあわせるとひとつの問題が予想される。すなわち、フランス語のフレーズを発音したとき、全体として不明瞭で聞き取りにくい発音になるばかりか、単音がフレーズ末でごまかされて発音されるという問題である。

単音練習上の別の問題としては、子音[R]を consonne vibrante として扱う点が挙げられるだろう。この場合、日本語を母語とする学習者は、喉をことさらに締め付けて[R]を発音するクセがついてしまい、[R]が不自然に強調される話し方をするようになる恐れがある（この問題の派生型としては子音[l]を[R]でおもわず発音してしまう[R]シンドロームがある）。[R]に関しては日本語母語話者の「クセ」を踏まえた練習方法を考える必要がある。

最後に、débutants を対象とする授業では授業進度にあわせて教員が（教科書の表現を使って）フレーズを用意する必要がある。Llorca のアトリエでは、リズムにあわせて文法的に正確な短フレーズを即興で創ることがしばしば求められたが、これは débutants には難しい作業であると言える。

2. Dynamiser les pratiques de l'écrit (Marie Thierion)

言語教授法を専門とする Marie Thierion が担当するアトリエである。アトリエ・タイトルにある dynamiser とは、個人作業、小グループ作業、クラス全体作業の三つのレベルを効率よく使い分け組み合わせることを意味する。アトリエでは、実際に三レベルを様々に組み合わせてメール、詩、faits divers、インタヴューなどを書く授業を体験した。これらの文章形式を学習することも作文の授業の目的であるが、sous-objectifs として各課の文法事項を練習・定着させることの重要性が確認された。

このアトリエの特徴は、体験授業の軸をなす教育視点ないしアプローチである。体験授業は基本的に perspectif actionnel を軸として組み立てられていた。すなわちクラスをひとつの社会として扱い、学習者をその中で活動する acteurs sociaux と見なす授業である。よって、クラスの「公用語」も学習中言語であり、教員は無論のこと、学習者間の会話もフランス語で行わなければならい。また作業結果（tâche accomplie）はかならずクラス全体で共有（mise en commun）され、学習者間の相互評価が行われた。このような授業において、教員はクラス内ではあくまで補助の役割に徹しており、学習者たちの自主的な動きを活性化させることがその目的である。

教員の役割として重視されていたのがタイムキーピングである。Thierion は、個々の作業の時間をつねに厳密にかつ最小限に設定しており、アトリエ参加者は毎回せき

立てられるように作業をこなした。だが、グループワークでは、学習者が互いの不足部分を補い合って作文を完成させることがしばしばあり、これも perspectif actionnel に基づく授業の効用のひとつであると言える。すなわち、作文のグループワークを通じて学習した会話表現を実際に使い、また学習中の文法事項を他の学習者に説明してみるといった「学習内容の定着」が可能となる。

特に興味深かったのは、faits divers を「優美な屍（cadavre exquis）」の手法を用いてクラス全体で書く作業である。クラスを先ず 4 人ないし 3 人の小グループに分け、それぞれのグループに作文のヒントとなる情景（男が倒れていた、火事があった、カラスが飛んでいた等）を提示し、faits divers の形式に沿った文章を書かせる。2 分後に各グループは別のグループのテーブルに移動し、その他人が書いた作文（当然未完）を読み、それにあった続きを 2 分で書く。この作業をまた別のグループに関しても行い、クラス全体で複数の faits divers を完成させる。最後に、これらの完成作品をクラス全体で共有し、文法事項の正確さ、faits divers の形式に沿っているか等を評価する。以上が作業の概要であるが、このアクティヴィテでは「ダイナミズム」、「創造性」、「学習内容の定着」という要点三つが有機的に組み合わされていると言える。

日本での授業を想定した上で指摘できる問題点としては、初級者対象の授業でグループワークの「公用語」をフランス語にすることの難しさである（ちなみにアトリエでは A1 レベルから B1 レベルまでを範囲として各段階にあった授業を参加者全員で考えた）。とはいえ、例えば通年授業では、前期の段階でクラスで学習者が使うべき expressions utiles を徐々に導入してゆき（« ça se dit comment… ? »、« comment dit-on… ? »、« je ne comprends pas… »、« on peut dire comme ça… »等々）、後期のある段階で六、七割がたフランス語を使ったグループワークを成立させることは可能かもしれない。

報告 2

2017 年度 夏季フランス語教員研修報告書

棚橋美知子

2017 年 8 月 14 日から 25 日の間、ブザンソンの CLA においてフランス語教員のための夏季研修に参加する機会に恵まれた。以下、①受講した授業、②生活面その他の 2 項目に大別し、研修内容を報告する。

① 受講した授業に関して

まず、本研修の受講システムについて述べる。

モジュール　　：期間中継続して受講する授業
フォーラム　　：1 回完結型の授業
アトリエ　：3 回または 4 回連続で完結する授業

受講者は月曜から金曜、8h30-10h、10h30-12h、13h30-15h の 3 つの時間帯に開講されるモジュールを受講した上で、15h30-17h に開講されるフォーラムもしくはアトリエを規定回数以上受講する。平日に毎日受講するモジュールと呼ばれる授業 3 つが基本となり、日によってそこにフォーラムまたはアトリエと呼ばれる授業が加わるイメージである。従って 1 日の流れとしては、8h30 に授業が開始され、モジュールのみの日は 15h に、フォーラムまたはアトリエのある日は 17h に授業が終わる。今回私が受講したのは以下のものである（アトリエは受講しなかった）。

モジュール

8h30-10h：Enseigner la phonétique par le rythme et le mouvement
10h30-12h：Favoriser les pratiques créatives et ludiques en classe de FLE
13h30-15h：Apprendre et enseigner la grammaire autrement

上記 3 つの時間帯それぞれに 6〜7 つの授業が用意されており、それらの中から各時間帯につき 1 つの授業を登録し受講する。おそらく出発前に CLA の HP において本研修用の個人アカウントを作ることになると思うが、そこから事前にモジュールを登録することができる。初日に現地で慌ただしく登録する必要がないし、研修開始から 2 日目までは登録変更可能なので、事前登録しておくとスムーズであろう。

« Enseigner la phonétique par le rythme et le mouvement »　Mme Régine Llorca

発音やイントネーションをいかに論理的かつ体験的に教えるかという授業であった。特にこの授業の特徴と思われる点は、（抽象的な表現になってしまうが、）リズムと身体の動きを使うことで、発音・イントネーション・会話リズムを、言葉による説明だけでなく、身体的・反射的感覚を通してイメージとして捉え身体にしみ込ませる方法論を紹介していた点である。研修生たちが実際にその方法論を体験して学ぶ授業スタイルであった。発音関係を教える際は得てして言葉による説明になっていた私にとっては、身体的・反射的感覚から来るイメージを加えた説明方法を楽しく学ぶこ

とができ、とても満足であった。是非授業に取り入れてみたいと思う。Llorca 先生は youtube にご自身のチャンネルをお持ちで、発音説明に関する様々な動画を投稿されている。これらの動画も是非授業で利用したい。

« Favoriser les pratiques créatives et ludiques en classe de FLE » Mme Régine Llorca

上記と同じく Llorca 先生の授業。「創造力を要する遊び」を通し、文章の作成、発音・イントネーション・文法事項の確認等をいかに行うかという授業であった。この授業も上記と同じく、先生が紹介される「遊び」を実際に体験して学ぶ授業スタイルであった。取り上げられた「遊び」は、rebus、charades、homophonie、rime、double sens 等が関わるものであり、既習者向けと言える。初級文法習得済み且つある程度の単語量が備わっている学生のクラスであれば、ここで紹介された「遊び」の要素を取り入れたら授業内容は面白さが加わった創造的なものになると思う。しかし既習者クラスだけでなく私が主に担当している初級文法・初級会話のクラスでも、少し手を加えればここで学んだ要素は援用可能と思うので是非授業に取り入れたい。

« Apprendre et enseigner la grammaire autrement » Mme Jennifer Coronati

文法の授業を言葉だけの説明と単純な練習問題でなく、いかに他の要素を取り入れて組み立てるかを考える授業だった。ある短い映像を使用して A1 から C1 の各レベルに応じた文法項目を取り入れた授業を組み立てる、時制の縛りをつけて詩を創作する等、グループワークを通して学んだ。その際、グループ作りや自己紹介の方法等、様々なアイディアも学ぶことができた。また、授業で利用できそうな youtube の動画も色々紹介してくださった。

フォーラム

15h30-17h：

- Découvrir la médiathèque du CLA et ses ressources
- Organisation et actualité du système éducatif français
- Découvrir le Musée du Temps --- Palais Granvelle

フォーラムとアトリエの登録は現地でしか受け付けておらず、基本的に週の初めに行われた。授業によっては人数制限があり、その場合登録は先着順で締め切られるので注意が必要である。

« Découvrir la médiathèque du CLA et ses ressources » Mme Alix Pelé

CLA 付属の図書館（宿泊先である Zénitude のすぐ側に位置）に行き、利用方法を司書の方が説明してくださる課外授業であった。当然ではあるが、言語学と言語教育学に関する蔵書が充実している図書館である。司書の方は親切で、A1 から A2 レベルでも読めるような定期刊行物等に関して質問をしたら詳しく教えてくださり、とても参考になった。

« Organisation et actualité du système éducatif français » M. Jean-Paul Tarby

フランスにおける現在の教育システムとその周辺に関する講義形式の授業であった。フランスの教育システムとその問題点、他のヨーロッパ諸国とフランスとの違い等を知ることができた。フランスにおける現在の教育システムの概要を把握するには

良い機会であった。

« Découvrir le Musée du Temps --- Palais Granvelle »　Mme Iris Kolly
　主に絵画と時計が展示されている Musée du Temps（大学のすぐ側に位置）に行き、講師の方がブザンソンの歴史を織り交ぜながら展示物を説明してくださる課外授業であった。ブザンソンは時計作りの町としても有名であるため、LIP 等フランス時計メーカーの歴史紹介や、「世界で最も複雑な時計」等様々な時計コレクションが興味深かった。

② 生活面その他に関して

宿泊先に関して

　ブザンソンでの宿泊は Zénitude という滞在型ホテルであった。部屋は非常に快適で、室内にはシャワールーム、トイレ、簡易キッチン、電子レンジ、冷蔵庫、テレビが備わっている。キッチンにはある程度の食器類と調理器具類、食器用洗剤とスポンジもあった。簡単な料理であれば十分にカバーできる範囲だと思う。コインランドリーはホテル内にあるが洗濯機と乾燥機がそれぞれ 1 台ずつしかなく、24 時間利用可能ではないので、手洗いで済ませられるものは部屋の洗面台で洗った。滞在中に一度部屋の掃除がされていた。その際、ベッドシーツやタオル類が交換されていた。また、ホテルの無料 wifi によるネット接続には困らなかった。Zénitude から大学までは徒歩で 15 分程、自転車で 5 分程の距離である。

町に関して

　ブザンソンは小さくも美しく、落ち着いた町であった。町の中心部には Monoprix や Casino もあり、日用品や食料品の買い物には困らなかった。ただ、研修期間がバカンスシーズンと重なっていたので、店によっては閉まっていた。ブザンソンにはパリの velib’と同じような自転車レンタルシステムがあり、機械で手続きをすれば自転車を利用することができる。町中に点在する自転車置き場が宿泊先のすぐ側と大学のすぐ近くにあるため、通学の際等快適に利用することができた。また、町の中心部から少し歩いたところに世界遺産であるシタデルがある。城壁の上は実際に歩くことができ、そこからの眺望が素晴らしい。

Activités culturelles に関して

　研修の期間中、CLA が文化プログラムを企画してくれていた。私が滞在していた期間中は、映画鑑賞、観劇、カラオケ大会、日帰り旅行等があった。いくつかの日帰り旅行に参加したのだが、場所によっては現地ガイドの説明付きだったので非常に満足であった。フランスの地方都市に行こうとしてもなかなか行く機会のない私にとっては、それぞれの町の雰囲気や歴史的経緯を知り、歴史的建造物の説明等も聞くことができとても勉強になった。特に、Le Haut-Doubs への日帰り旅行には Doubs 川周遊も含まれており、船から見える景色は本当に素晴らしかった。また、滞在期間によっては、CLA の夏季研修生が自国の文化を紹介する soirée internationale というプログラムがある。会場は Grand Kursaal という、大学のすぐ側にあるホールである。私たちの滞

在期間はこのプログラムに当たっていたので、他の参加者の方々と出発前にメールでやり取りをし、スクリーンを使った紙芝居を上演した。他の国々の出し物は歌やダンス、面白い寸劇等であった。当日は伝統的な衣装を着られた方々も多く、会場はとても鮮やかであった。私たちの内一人が浴衣を持ってきてくださっており、その華やかな姿はとても好評を得ていた。あのような場面には伝統衣装がよく似合うと実感した。カジュアルで賑やかな soirée なので是非参加されると良いと思う。

その他

- 研修スタッフに設定をお願いすれば、学内でも大学の無料 wifi が使えた。
- 学食はあるが、場所は宿泊先の Zénitude の側である。少々移動時間が発生するため、お昼は近くのレストラン等で済ませることが多かった。
- モジュール、フォーラム、アトリエの授業リストの中に受講したいと思う授業があっても、残念ながら自身の滞在期間中には開講されていない場合がある。
- 各自に USB が配付され、受講している授業の資料やレジュメなどのデータは最終日近くにまとめて USB にコピーする形式だったので、プリントなどで荷物がかさばることはなかった。

ブザンソンは郷土料理も美味しく、穏やかで美しい町であった。また、CLA の先生、スタッフの方々はとても親切で熱心だった。おかげで安心して研修を受けることができたし、世界各地から来ていたフランス語教員、または将来教員になる予定の研修生たちとも交流を持てたことは大変刺激になった。本研修で学んだことは是非授業に取り入れていきたいと思っている。また、今回一緒に研修を受けた日本人研修生の皆さんとは有意義でとても楽しい時間を過ごすことができた。ここで改めて感謝を申し上げたい。そして今回の研修をサポートしてくださった関係者の皆様にも、この場を借りて心からお礼を申し上げたい。

報告 3

2017 年夏季ブザンソン・スタージュ報告

根木昭英

□ スタージュの概要

2017 年 8 月 14 日（月）より 8 月 25 日（金）までの二週間、ブザンソンのフランシュ・コンテ大学付属応用言語センター（CLA）にて開催されたフランス語教育夏季スタージュに参加した。12 日にパリに到着してほかの日本人スタジエール（4 名）と合流したのち、一泊してから TGV にてブザンソンに移動した。

ブザンソンは大きく湾曲して流れるドゥー川に三方を、もう一方を小高い丘に囲まれた天険の地であり、古くはローマ時代から要塞として使われていたようだ。現在は丘のうえに、ヴォーバン設計の城砦（citadelle）が聳える。私たちが寄宿したのは、ドゥー川のほとりにある宿泊施設で、そこから川を越えて中心街のフランシュ・コンテ大学に毎日通うこととなった。宿泊施設から大学までは徒歩 15 分ほど離れているが、前日下見に行ってみると、大学建物の入り口には講習場所を示す貼り紙がされていた。ほかにも、ブザンソン到着日には駅で CLA の方がわざわざ出迎えてくれるなど、行き届いた配慮に驚かされることが多かった。

講習一日目の午前にはまずオリエンテーションがあり、各国のスタジエールとはじめて顔を合わせた（四週間の受講も可能なため、もっと早くから参加しているスタジエールもいる）。スタジエールの出身国は、アルジェリア、スーダン、マリ、チェコ、アゼルバイジャン、スペイン、カナダ、ハンガリー、リトアニアなどまさに多様であり、多くは私たち日本人と同じくフランス政府給費による受講生であった。オリエンテーションでは、講師やスタッフの紹介ののち、選択可能な授業や履修方法の説明が行われる。授業には module／forum／atelier の三タイプがあり、module を三コマと、forum 三コマあるいは atelier 一コマを受講する必要がある。毎日授業のある module については、一回目の受講ののち、別のものに変更することも可能である。私は、module 三つと forum 三つを受講することにした。以下、それぞれについて記す。

▪ **Module 1 : « Apprendre et enseigner avec l'image et la vidéo »**（講師：Carole Doillon 氏）

おもとして動画を活用しつつフランス語教育を行う方法を扱った授業である。ネットに繋がってさえいればいつでも世界中の動画が見られるこの時代にどういった語学の授業が可能かに興味があり、受講した。授業では、まず講師とスタジエールそれぞれの自己紹介ののち（自己紹介も通り一辺倒のものではなく、二人ずつグループになって準備ののち相手をクラスに紹介するというもので、初対面の受講者相互の心理的壁を取り払う、いわゆる「brise-glace」と呼ばれる効果を狙った活動である。やり方に多少の差異はあるものの、これはほかの授業についてもおよそ同様であり、もちろんそれ自体がひとつの方法である）、三分程度の子供向け動画やテレビドラマといった動画を題材にフランス語をいかに教えるかをアトリエ形式で、つまり小グループで実際の授業を準備しつつ学んだ。アトリエ活動は、各動画に関して授業を六段階（« Mise en route », « Découverte du document », « Compréhension globale », « Compréhension affinée », « Travail sur la langue », « Production »）に分け、全体の学習目標と各段階における目標を明確化しながら全体を組み立ててゆくという仕方で進んだ。たんに動画

を見せるだけではなく、それぞれの段階に学生向けの小課題（聞き取りから文法事項の実践、ディスカッションまで）を設定することで、能動的な学びを引き出すことがモジュールの眼目であった。

▪ **Module 2 : « Se perfectionner à l'oral »**（講師：Déborah Gros 氏、Caroline Doillon 氏）
第一には受講者自身のフランス語力向上を目的とした授業であるが、そこで用いられている方法論はもちろん、スタジエール自身の教育力向上に役立つ多くの手掛かりを含んでいる。授業では、最初に自己紹介を行ったあと、小グループに分かれてのディスカッションや、「幸福」や「結婚」などさまざまなテーマについての模擬インタヴューといった実践的活動を行っていった。ほかにも、鼻母音の発音やアクサンに関する規則などの確認も行った。いずれの活動においても、じっさいの課題に取り組むなかで考えをまとめたり規則を発見したりするのは受講者であり、講師による介入は表現の訂正など必要最小限に留められている。

▪ **Module 3 : « Apprendre et enseigner la grammaire autrement »**（講師：Jennifer Coronati 氏）
いわゆる反復ドリル的ではない仕方による文法教育の可能性を探る授業である。たとえば複合過去における助詞 avoir と être の使い分けであれば、クラス全体でのゲーム（二名の学生が avoir、être それぞれの助詞担当として教室中央に立ち、それに対して残りの学生がクイズ形式で自分の選んだ動詞の複合過去を問う。助詞が avoir の場合、担当学生は一歩前に出る、など）を行って文法規則の定着を図る、といった具合である。ludique な要素を多く取り入れつつ、生きた文脈における文法規則の習得と定着を促すとともに、学生の能動性や集中力を引き出すことを狙っている。

▪ **Forum**
それぞれ一コマ（90 分）の実践授業である。一つ目のフォーラムは「Découvrir la médiathèque du CLA et ses ressources（講師：Alix Pelé 氏）」で、私たちの宿舎近くにあるメディアテックの利用方法、所蔵資料などについてその場で学んだ。CLA はフランスでも有数の外国語教授法研究の拠点だけあって関連資料が多い。研修期間に資料をゆっくり見る時間がなかったのは少々残念であった。二つ目のフォーラムは「Organisation et actualité du système éducatif français（講師：Jean-Paul Tarby 氏）」で、フランスの教育システムおよびその現状について講演形式で学んだ。私は現在大学で「フランス語圏の現代社会」を担当していることもあり、それほど目新しい情報はなかったが、統計に基づいた解説は非常に説得的であった。フランスにおける学校のヴァカンス制度と旅行産業とが強い関わりを持っているという指摘は新鮮であった。三つ目のフォーラム（「Victor Hugo, l'homme et ses combats, d'hier à aujourd'hui（講師：Arlette Burgy-Poiffaut 氏）」）では、大学のすぐそばにあるユゴーの生家を訪れて解説を受けつつ見学を行った。ユゴーが生まれたさいの話や死刑制度廃止運動のことなど、興味深い内容であった。

受講したモジュール全体に共通して言えるのは、どのモジュールも、いかに主体的な仕方で受講者自身を授業にコミットさせるか、その方法論を（主題的にも、じっさいの構成においても）主要な関心として準備されているという点である。こうした仕方で組み立てられた授業を受講すると、時間が早く経つように感じられるのは事実であると思う。今回の研修では中等教育の生徒を対象とした外国語教育も想定されているので、じゃっかん子供向けと感じられたところもなかったわけではないが、大学生の水準に合うよう調整しさえすれば、こうした方法は、狭義のフランス語教育にかぎらず、ほかの講義科目やゼミでも十分に活用可能であろう。

□ そのほかの活動について

▪ **Activité culturelle**

CLA は語学学校でもあるため、平日の映画上映会や演劇上演、週末のエクスカーションなど、学生向けに多くの文化活動が準備されている。私は、スイス国境へのエクスカーションに参加した。午前中にはポンタルリエ近くにあるジュー城（要塞）を見学したが、その日は偶然「Journée Napoléon」に当たっており、ナポレオン一世時代の衣装に扮した人々による大砲発射の実演や銃装填の解説などがあったのは幸運であった。昼食に特産のヴァン・ジョーヌを使った鶏料理とモルビエ、コンテチーズをいただいたあと、午後にはフランスとスイスの国境を流れるドゥー川上流のクルーズに参加した。のんびりと草を食むモンベリヤール牛の放牧地から出発して、石灰岩の地層が剥き出しになった急峻な岸壁にいたるまでの景色の移り変わりは壮観であった。

▪ **Soirée internationale**

CLA の各国スタジエールと語学学生が参加して、中心街の Kursaal 劇場で市民を前に出し物を披露する soirée internationale に私たちも参加し、ラフカディオ・ハーンの「雪女」を紙芝居形式で上演した。ダンスや音楽で会場が盛り上がるなかでの「怪談」上演は少々異色であったが、全体としてはたいへん好評であったと思う。渡航前、スタージュ受講中の限られた時間で準備を行うこととなったなか、プロ並みの手腕を発揮してくださった紙芝居作成担当の飯田氏、音響担当の福田氏には、あらためてお礼を申し上げたい。ほかの出し物もそれぞれのお国柄を生かした内容で、大いに楽しむことができた。日本の語学学生によるダンスもたいへん素晴らしいものだった。

□ 最後に

今回の研修において予期せぬ収穫となったのは、各国スタジエールとの交流であった。先述のように、研修参加者の出身国は多岐にわたる。互いの立場が近いということもあって話ははずみ、各国のフランス語教育事情だけでなく、共産主義時代のチェコの様子やマリにおけるイスラム原理主義勢力の問題、さらにはスーダンにおける内戦の現状などについて、当事者の生の声を聞くことができたのは非常に貴重な体験であった。

もうひとつ印象深かったのは、ブザンソンで出会った人々である。CLA での講師やスタッフの方の配慮や熱意に感銘を受けたことはすでに述べた。外国語教育法そのものはひとつの技術であるが、結局のところ、その根本にあるのはこうした情熱以外のものではないのだろうとあらためて考えさせられた次第である。それだけでなく、レストランや店で出会う街の人々も、パリに比べてずっと友好的であると感じた（これはほかの国のスタジエールの印象でもあった）。地方都市と都会との違いと言ってしまえばそれだけのことかもしれないが、このことはブザンソンという町の大きな魅力のひとつを為していると思う。

最後に、今回の研修の機会を与えてくださったフランス大使館のみなさま、日本仏語仏文学会および日本フランス語教育学会のみなさま、また CLA の講師・スタッフのみなさまにあらためて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

報告 4

2017 年度夏季フランス語教育研修報告書

福田裕大

以下に記すのは、2017 年度夏季フランス語教育研修（於：フランシュ・コンテ大学応用言語学センター、2017 年 8 月 14 日～25 日）に関する報告である。

スタージュの概要

月曜日から金曜日まで、午前に二つ、午後に一つのモジュールに出席することを基本とする。あわせて、二週間のセッション期間中に、ひとつのアトリエを継続的に受講するか、最低三つのフォーラムに参加することが求められる。以上の受講完了をもって受講証明が発行される。

モジュール

今回選択したモジュールは以下の通り。

1. Enseigner la phonétique par le rythme et le mouvement (Régine Llorca)

フランス語を発話する際の音感覚を、リズムや身体運動を通じて学ぶ。教授法でもあり、教員一人一人が音としてのフランス語をいちから見つめ直すための貴重な機会でもあった。担当教員はフラメンコのダンサーでもあるせいかリズム感に優れており、また、音を身体的な感覚として伝達する技術に長けている。朝一番の授業だったが、様々なアクティビティを通じて体が徐々に目覚めていき、そのなかにフランス語の音の響きがひとつひとつ新たに入ってくるようで、じつに鮮烈な時間だった。

2. Se perfectionner à l'oral (Carole Doillon, Deborah Gros)

教授法というよりは、個々の教員のフランス語運用能力を向上させることを目指したもの。鼻母音をはじめとする種々の発音を再確認しつつ、模擬インタビューやディスカッションなど、とにかく「フランス語で話す」機会が多数設けられた。なまじ「教員」などになってしまったために「フランス語ができる人間」であることになってしまっているが、まだまだ改善点があるということ、そしてまた、向上する意識をもてば（いくつになっても）向上は可能であるということを実感させてくれた。「教育研修」としては不満を覚える向きもあるだろうが、個人的には非常に有意義だった。

3. Enseigner et apprendre avec les média (TV, Radio) (Deborah Gros)

「短いラジオ番組の制作」を軸にしたフランス語教育のあり方を実践的に考える授業。最も多くの刺激を受けたモジュールだった。講師はフランスとスペインでラジオ番組の制作に実際に携わった経験があり、個人レベルでもサウンド・スケープを意識したいくつかの音作品を作っている。このモジュールで実際にラジオ番組制作をおこなうことを通じて、この種の「ものづくり」のなかにフランス語の教育を活性化させるための要素が数多く含まれていることに気づかされた。例えば原稿を書くことやインタビュアーの話を聞くことは、それぞれ「作文」や「リスニング」といった名のもとに課される作業よりもはるかに高い主体性を生み出し得るし、録音を通じて自分や他者の発するフランス語に向き合うことで、発音に対するより高い意識を引き入れることもできる。幸い、勤務校の国際系学部でコミュニケーション重視の授業を担当しているので、これらのメソッドをぜひ実践してみたい。

選択したフォーラム

1. Organisation et actualité du système éducatif français (Jean-Paul Tarby)

フランスにおける教育システムの現状を概説する講義。受講生それぞれの出身地域における言語教育の状況についてのアンケートもあった。

2. Découvrir la médiathèque du CLA et ses ressources (Alix Pelé)

CLA の図書館を訪問し、フランス語教育に関連する資料の紹介がなされた。滞在期間が短く、またスタージュそのものが濃密であったために実際に活用する機会がなかったことが残念だった。

3. Balades sonores à Besançon (Intervenant Extérieur)

直前になって突如追加されたフォーラム。参加者たちには MP3 プレーヤーとヘッドホンが貸し出され、ブザンソンの街を歩きながら、特定のスポット上で指定された録音物を聴く。現実の場所に身を置きながら、その場所がもつ文脈から乖離した音風景（フランス語のモノローグが多数含まれる）に耳を澄ます、というアクティビティである。原案は Pierre Laurent Cassière なるサウンド・アーティストによるもので、自身の研究上の関心とも近いために非常に面白かったが、フランス語教育とどう絡めるかは難しいところ。状況から切り離された（＝異化された？）音を提示することで、リスニングに対する集中力が上がること「も」ある、ということを体験できたのは興味深いが……。

スタージュ期間を振り返って

ブザンソンを訪れるのは初めてだったが、豊かな緑と爽やかな空気、そして大らかな人々のおかげで、ドゥー川に囲まれたこの小さな街が大いに気に入ってしまった。治安も大変よく、パリなどとは違って、昼夜を問わず安心して街の細部を味わうことができる。こうした街の雰囲気に支えられて、期間中はスタージュの活動に集中することができた。CLA 主催の各種アクティビティも充実しており、フライブルグや「ドゥー川下り」などのエクスカーションを通じて、様々な国からやってきた参加者達と交流を深めることができた。

最も濃密な思い出となったのは、毎年のスタージュ恒例行事である soirée internationale である。本年度の日本グループは、ラフカディオ・ハーンの「雪女」を紙芝居で……というのがもともとのアイデアだったのだが、いろいろあって紙芝居風の短編映画を公開することになってしまった。根木昭英さんによるイントロダクションに始まり、飯田賢穂さんの描いた素晴らしい絵に、棚橋美知子さんと村中由美子さんの朗読を合わせた、10 分を超える力作である。私自身は、種々の効果音の作成と朗読部分の録音と編集、そして BGM 等を含めた全体の montage を担当した。

数年前のスタージュ報告で知人が書いていた通り、準備作業はさながら「部活の合宿」のようであり、まさに学生時代のように「ものづくり」に没頭することができた。実際のところ本番では、日本グループの次に登場したアゼルバイジャンのご婦人方による単純だが強烈な出し物（＝カラオケ）にあっさり評判をさらわれてしまうのだが、こうした素敵なオチも含めて、同期のスタジエール諸氏とは忘れがたい記憶を共有することができたと思う。

そのように書いてしまうと感傷めくが、この soirée の準備に取り組んだことによって、上記モジュールで学んだことがらと実践的に向き合うことができたのは、偶然ながら実に有意義なことだった。具体的には、朗読の練習に立ち会うなかで、フランス語の様々な音のあり方を見つめなおしたり、録音された声とヘッドホン越しに向き合うことで、他者の発音やイントネーションに注意を凝らしたり————こうした体験のそれぞれが各モジュールの内容と共鳴しあい、それらを通じて得たものをいっそう豊かなかたちで消化することができたように思う。

思い返すに、かつての留学期間が遠い過去のものとなり、職場でもプライベートでもフランス語を話す機会などほとんどない日常を送るなかで、いつしか自分はフランス語話者としての己を磨こうとする意識を失っていたのかもしれない。あるいは、うえにも書いたが、いつの間にか教える側に回ってしまったことで、どこかで気持ちが「上がり」を迎えていたのかもしれない。ひどく個人的な感慨で恐縮だが、今回のスタージュで得た最も重要なことがらは、こうした現状に対する自覚である。スタージュの名目が「教育研修」である以上、種々の方法論や技法にももっと注意を向けねばならないのかもしれないが、ブザンソンでの二週間を振り返って思い返されるのは、それぞれのクラスで耳にしたり口にしたりした具体的な声の響きばかりである。それらの様々な響きのなかに、今の自分にはまだ手の届かないものがあるということを胸に刻み付けておきたい。そこに近づくためにあれこれもがきながら、フランス語話者としても教育者としても、今後いっそうの成長を重ねたいと思う。

報告 5

ブザンソン研修参加報告

松本 卓也

1. はじめに

フランシュ・コンテ大学 人文科学部キャンパスに於ける夏期教員研修の 7 月 31 日から 8 月 10 日のセッションに参加した。基本的な概要紹介は事前の資料や過去の参加者の報告に譲るとして，本稿では私自身が選択したモジュール・フォーラムや気付いた点について述べる。

2. 選択したモジュール

2.1. Pédagogie de l'oral : favoriser les interactions en classe de FLE

参加者同士でアクティヴィテを作成し，実践を通じて注意点や改善点を検証していく，というものであった。学習者の立場を離れて長く経つと見え難くなる点が多いことに気付かされ，日頃の実践を見つめ直す良い機会となった。

2.2. Motiver les adolescents à travers une pédagogie active

学んだことを発信に繋げるという視点からの，インターネットや視聴覚メディアを用いたアクティヴィテの紹介が主なものであった。アウトプットの活動が中心に紹介されていたため，対象となる学習者のレヴェルは少なくとも A2 はないと難しいと思われる。

2.3. Phonétique et pratiques de classe

フランス語音声学の基礎を確認した上で，時には参加者同士で，時には大学の留学生を招き，発音矯正を実践するというものであった。研修には 20 ヶ国以上からの参加があったため，日本人にはなかなか起こり得ないエラー（どれも母語の影響が強い）を初めて認識する機会となった。人間が音を認識するメカニズムの一端を知ることとなり，非常に勉強になった。

3. 選択したフォーラム

3.1. Organisation et actualité du système éducatif français

内容はほぼ題目通りであったが，時事的事項よりも基本的事項の解説という印象が強かった。学部等でフランスの教育制度について学んだ人にとっては物足りないと感じるかもしれない。

3.2. Apprendre et enseigner avec TV5 Monde

TV5 MONDE がインターネット上で公開している番組を用いた学習・教育方法が紹介されたが，授業というよりも自学での利用を想定した紹介であり，加えて既に知っている場合は物足りないと感じるだろう。

3.3. Mieux comprendre la dyslexie

講師自身の経験を交えた，難読症の症例やメカニズムの解説が主なものであった。教員としては難読症の学習者に対する学習指導上の配慮を知りたいところだったが，その点についての言及が一切なかったのが惜しいところである。

モジュールはどれも満足できる内容だった反面，フォーラムの方は期待していた内容と実際の内容に大きな隔たりがあった。これら講義系のフォーラムの他に，実際に手作業をするものや，地域の美術館等を訪れるものもあり，こちらは他の参加者から良い感想をよく聞いた。しかしこれらのフォーラムには講義系と異なり人数制限があり，且つ先着順であったため申し込みの時間帯（昼食時）に参加希望者が殺到し，その後の午後の授業に出られない，或いは遅刻する者が多くいたのは教員研修として非常に嘆かわしい点である。抽選制にするなど，次年度以降の運営で改善されていることを期待したい。

4. 滞在中の諸注意

4.1. 空港での奨学金受け取り

日本からの参加者は CAMPUS FRANCE から滞在費諸々の奨学金を給付されての参加となり，フランス到着時に空港での受け取りを指示される。空港に着いた安堵感からうっかり忘れてしまうと，ブザンソンでの受け取りができず，帰国まで待たされることになってしまう。参加費自体は研修開始時に納入済みなので受け取るのは数百ユ

ーロの滞在費のみとなるが，滞在中の余計な気掛かりは少ないに越したことはないだろう。

4.2. 宿泊地での洗濯

日本人参加者は例年，文学部キャンパスから徒歩十数分の ZENITUDE というアパートメントホテルに宿泊することになっている。洗濯機も乾燥機も共用の物が一台ずつあるが，乾燥機の方は 1 時間回しても完全に乾かない出力なので，洗濯紐のような物を持参した方が無難かと思われる。部屋に備え付けのハンガーが 10 本ほどあるが，これもどうやら部屋により異なるようで，必要と感じる場合はハンガーの持参も検討した方がいいだろう。

4.3. 自転車の利用

ブザンソンには vélocité という，パリの vélib'のようなサービスがある。宿泊地からスーパーまでかなり離れているので，例えば飲料水をまとめ買いした際に，夏の暑さのもとで重いペットボトルを何本も運ぶのはさすがに楽ではない。また，市内の移動の際にも重宝するので，積極的に利用すると滞在が楽になるだろう。

4.4. 小旅行

週末は CLA から幾つかの小旅行のプログラムが提供されている（私の参加期間では Haut-Doubs と Strasbourg であった）。日本人参加者には前者が無料で提供されていたが公のアナウンスは無かったので，申し込み時に確認してみるといいだろう。

4.5. 食事

前述の ZENITUDE では朝食も夕食も予約に含まれていないが，朝食は一日 8 ユーロのビュッフェが用意されている。またキッチンも付いているため，近くのスーパーで購入した食材を調理することもできる。近くには MONOPRIX が二軒と，日曜日も営業している個人経営のスーパーがあり，どちらも前述の自転車があれば 5 分程度で行くことができ，滞在中はかなり利用することが考えられるため，予め場所を調べておくといいだろう。

4.6. キッチン

前述のように部屋にはキッチンが付いており，基本的な調理道具は揃っている。また，電子レンジもあるので，簡単に済ませたい場合はレトルト食品という手段もあり得るだろう。

4.7. 文学部キャンパスでの Wi-Fi

運営側からのログイン ID とパスワードの公式なアナウンスはないが，受付で申し出れば発行してもらえるようである。

報告 6

2017 年度夏期研修報告
―ブザンソン、Le CLA にて―

丸尾 リサ

1. はじめに

7 月 31 日～8 月 10 日まで、ブザンソン、フランシュ・コンテ大学の Le CLA にて、フランス語（FLE)教員研修を受講した。私にとってこの研修は、以下の二つの点で、非常に意義深かった。第一点目は、今回私は、これまで学んだ FLE の授業に対する知識を復習し、深めることを目標として授業を選択したのだが、その意味で理解が深まったこと、第二点目は異文化交流によって学ぶことが多かった、ということである。
参加した授業は、ほとんどがグループ学習中心で、様々な国籍のフランス語教員、（教員を管理する立場の）インスペクター、教員志望の学生達と、同じクラスメートとして、プレゼンテーションの準備を進める機会が多々あった。マグレブ諸国出身者が参加者の多数を占めていたが、同じ学習者として一緒に机を並べて勉強できる稀有な環境だったからこそ、これまで知識にすぎなかった «Français langue seconde »と « Français langue étranger »という二つの言葉が現実として響き、学ぶことが多かったのである。以下、今回の研修について報告する。

2. Formation

certificat 取得のためには、3 つの Module に加えて、Forum を 3 つ、あるいは Atelier1 つを選択する必要がある（各 1 コマ=1 時間 30 分）。授業データは、各授業の最後（あるいは後日メールにて）に USB メモリ（CLA から支給）にコピーしてくれる。私が選択した授業は、以下の通りだが、ここでは、module の授業についてのみ報告する。module の授業内容が、先に述べた FLE 授業の理解という目的に適っていて、報告することが多々あり、全てを記載するのは困難だからである。

■ Module
- Planifier et animer un cours de FLE (8:30-10:00, Mallet Claire)
- Apprendre et enseigner avec la chanson francophone (10:30-12:00, Poirié Nicole)
- Phonétique et pratique de classe (13:30-15:00, Delbende Jean-Christophe)

■ Forum (15:30-17:00)
- Apprendre et enseigner avec RFI-SAVOIRS(Gros Deborah)
- Organisation et actualité du système éducatif français (Intervenant Extérieur)

■ Atelier (15:30-17:00)
- Programmation neurolinguistique et gestion du stress (3 séances) (Delbende Jean-Christophe)

" Planifier et animer un cours de FLE "は、「あなたの国ではフランス語は義務ですか？それとも義務ではない？」というクレールの第一声から始まった。この時クレールが使用した « captive » « non-captive »という言葉から、今現在、私の目の前にいる、大多数の参加者にとって、フランス語は話すことができなければならない言語であり、逆に彼らにとって、日

本ではフランス語が選択肢の一つなのだ、という事実を、突然、意識させられた。

年齢も様々なマグレブ諸国のクラスメートとの授業内容は、グループに分かれ自分達でテーマやマニュアルを選択して授業計画案を発表する、という内容だった。教室での講義に加えて、CLA の図書館に移動してグループごとに複数のマニュアルを手に取り、どの教科書を使用するかを話し合った。教科書を選択してテーマが決まったら、授業を行うために必要な、lexicaux, structure figées, grammaticaux, phonologique, socio-culturelle をみなで考えた。その過程で行き詰まったら、クレールに質問し、また自分達で話し合いを続ける。教員はそれぞれのグループを回り、学生達の授業作りの方向性が定まるように、自主性を尊重しながらアドバイスをする。私達のグループは、当初、KIOSQUE2 の環境をテーマにした課を扱う予定だったが、みなの関心と授業の目的が「nettoyer un jardin public pour le planet au jour de sensibilisation」に移り、それを tâche として設定した時点でクレールから、「マニュアルから離れ、tâche を達成するためには何が必要か考えなさい」というアドバイスがあった。私はマニュアルを使用することばかり考えていたが、大事なのは授業目的と tâche であり、tâche から出発して、それを実現するためには、何を教える必要があるか、ということだと再認識させられた。グループのメンバーは、レバノンやチュニジアの 20 代の女性達だったが、私はこうした環境デーが各国にあることを知らなかったので、社会文化的な面でも教えられ、大変勉強になった。

二つ目の Apprendre et enseigner avec la chanson francophone は、FLE の枠組みの中で、chanson を使用しながらどのように授業(CO)を進めていくかについて、理解を深めることができた。方法としては、最初に聞いた複数の歌の中から好きなものを一つ選んで、4 つのグループに分かれ、各グループごとに選択した歌を使用して、FLE の枠組みの中でどういう授業を行うかを発表する、という手順である。最初に Nicole が例として一つの歌をモデルにしながら Compréhension globale から détaillé へと質問を変えていくやり方を説明してくれて、それをヒントに各グループで、発表に向けて授業案を作成した。私達のグループで選択したのは"Tu peux compter sur moi"(Bénabar)で、アルジェリア人のエコールノルマルの男子学生とアゼルバイジャン人の、小学生にフランス語を教えた教員歴の長い女性がメンバーだった。話し合いの中で、メンバーが、歌の中の口語的な部分を抜き出して、スタンダードなフランス語ではどう言うか、という面白い質問を考えてくれて、なるほどと膝を打つ場面もあれば、質問がテキストを基にした Compréhension globale から détaillé という方向から逸れて文法に寄りすぎてしまうこともあったが、そこで Nicole が回ってきて方向修正してくれた。授業案から発表まで、グループメンバーで協力し合いながら共同で行えたという点で、非常に良い経験だった。

授業中、この授業案は、FLE の枠組みの中で、あくまで外国人を対象として作成しなければならないのだと強く意識させられる出来事があった。別のグループの発表の際、戦場での苦しみをテーマにした Marie（Johnny Hallyday）を使用した授業案を巡って、マグレブ諸国出身(インスペクター)である一人の学習者と Nicole の間に、論争が起こったのだ。この学習者は、選んだ歌の文学的側面を深く追いながら授業を進める案を示したのだが、Nicole は、これは文学の授業ではなく、FLE の授業で学習者は外国人なのだから、文学的側面よりも、言語を教えることを第一目的にすることを提案した。しかし、両者の意見が噛み合わず、緊張した雰囲気になったのだが、ここでもまた再び、フランス語が準公用語的な感覚で使用されている国と、そうではない日本との違いを認識させられた。

三つ目の « Phonétique et pratique de classe » は verbo tonale という方法論で、身体を使って発音矯正を行う方法を学んだ。初めはみなで輪になって、手を叩いたり、タップダンスのように床を踏んでシラブルの数を確認して、次に小グループで、例題のシラブルに合う文章を作って発表する。ジャン・クリストフは、みなをリラックスさせ、発言を促すのが上手で、わからない部分があれば、同じグループのメンバーに質問し合える雰囲気が自然にできてい

った。実際、グループのメンバーは、小学校以前からフランス語のテレビ番組やラジオに慣れていて、年齢は若くても、フランス語を操ることに長けているマグレブ諸国出身者が多いため、質問することで疑問を解消できることも多い。また、複数の国籍の違う初級者の外国人をクラスに呼んで、各グループを回ってもらって発音矯正を行う機会があったが、同じグループのクラスメートがどう教えているかを見ることも勉強になる。クラス全体でも様々な発音矯正の機会が設けられ、お互いに、それぞれの国でどの発音が苦手なのか、矯正するにはどうしたらよいのかを話し合った。各国によって、口の動きや舌の位置も違うのだから、当然、苦手な音は国によって異なるのだが日本国内ではそれを意識することがほとんどなかったので、実際にそれを目で見て実感できたことも、ありがたい経験だった。

3. 課外活動

期間中は、module も Forum&Atelier も非常に充実していたが、その他にも様々な課外活動が安価、あるいは無料で用意されている。それが他国の参加者&日本人同士の交流の機会にもなり、CLA のスタッフも熱心に活動を盛り上げてくれた。Bateau-mouche での川下り（ブザンソン市内）、Haut-Doubs への遠足（日本からの参加者は無料）の他に、同じレジデンスの居住者同士で行った映画（「ルージュの手紙」）、バロック音楽のコンサートなどである。また、ブザンソンはヴィクトル・ユゴー生誕の町でもあり、初日に Maison Victor Hugo を訪れた（CLA の学生は期間中無料）。また、授業最終日に日本人同士で地元のレストランでチーズフォンデュを堪能したことや、遠足の川下りの観光船の中で全ての国の参加者が各国の歌を歌うことを推奨され、日本人同士「ふるさと」を歌ったことも、忘れがたい思い出となった。

4. まとめ

全体を総括すると、今回の formation は、compréhension globale から compréhension détaillée へ、oral から écrit へ、connu から innconnu へ、compréhension から production へ、という、FLE の授業作りの大枠を、復習しながら理解を深められたという意味で非常に有意義だった。しかし、発音矯正も含めて今回の formation にこれほど充実感を感じることができた理由は、あくまで、DUFLE, 授業見学、春のスタージュという流れが先にあって、その後に、この研修があったからこそ、理解を促進できたのである。そうした意味では、Le CLA の先生方と同様に、これまで FLE の授業について熱心に教えて下さった全ての先生方に感謝したい。

また、この formation は、これまで述べてきたように、多数のマグレブ諸国出身の教員と授業を受けたという点で、日本における経験とは違っていた。これまで私の頭の中では、フランス語の授業を行うとしたら、常に学習者が日本人であることしか想定してこなかった。しかし CLA では、教員も様々な国籍の参加者を意識していて、私自身がほとんど知らないマグレブ諸国を含めた各国の文化や日本の文化もよく勉強し、尊重している、という印象を受けた。

ブザンソンは城塞とドゥ—川、豊かな自然に囲まれた美しい町で、Le CLA があるためか、町の人達は外国人に慣れていて、開放的である。約 10 日間の滞在で、この町にすっかり魅了されてしまったが、実は、今回、FLE の授業への苦手意識を克服したくて、アトリエや Forum に欲張って参加したり、発表の準備でうまく時間配分ができず、いくつか町の見どころを見逃してしまった。しかし、ふと気づくと、マグレブやスペインから来ている参加者が、既に高いレベルなのに選択した以外の授業にも積極的に参加していて、良い意味で貪欲だと気づき、刺激された面もあった。

ブザンソンには歴史的な建物や素敵な美術館も多く、観光の面でも心残りがあるが、実は授業に関しても、文学の授業を初め、フランスの文化的な側面を学ぶため、興味を惹かれる module や atelier が複数あった。いつかまた、取り残した授業への出席と観光も含めて、再びブザンソンの町を訪れたい、という思いを残す滞在だった。

最後に、この formation の中で、FLE の授業、異文化交流の他に、もう一つ気づいたことがあったので、それを述べてこの研修報告を終えたい。先に記載したように、この Formation でシャンソンの授業を選択したが、実は私は、恥ずかしながら、シャンソンについてはほとんど無知なのである。それにもかかわらずこの授業を選択したのは、第一週目で授業見学をした時に、シャンソンを通じて FLE の授業の大枠を学ぶことができそうだと感じたこと、下手でも歌を歌うのが好きなこと、以外の理由として、フランスやフランス語圏のシャンソンについて少しでも知りたい、という密かな願望があったのだ。ある日、Nicole が授業の中でジョルジュ・ブラッサンスの" Le Gorille "という歌を取り上げた。「ゴリラに気をつけろ！」というリフレインの多い奇妙なこの歌が、実は死刑廃止を訴えているのだという説明を聞いた時、フランス人の中にある健全な批判精神は、歌の中にも生きている、ということに気づき、もっとフランス文化について知りたい、学びたい、という気持ちが湧き起こったのである。そして、その時に、フランス語の背景にはフランス文化があり、両者を切り離すことは不可能なこと、そして、フランス文化を知ることは、フランス語を教えたいという気持の原動力になるのだ、と気づいた。当然のことなのかもしれないが、私はしばらくこの当たり前の事実を忘れていた。FLE、異文化＆日本人同士の交流、フランス文化への興味とモーチベーション、フランス地方発見という様々な点から、実り多い経験をさせていただいた。この経験をぜひ今後につなげ、生かしていきたい。

報告 7

ブザンソン CLA 夏期スタージュ報告書

村中　由美子

1.　はじめに：スタージュ概要・登録手続きについて

2017 年 8 月 14 日（月）～25 日（金）の期間、ブザンソン CLA (Centre de linguistique appliquée) において夏期フランス語教育スタージュに参加した。私たちが受講したフランス語教師のためのスタージュと同時に学生のためのフランス語夏期講習も開催されており、この夏期講習が CLA 校舎で行われたため、私たちの研修はフランシュ＝コンテ大学の校舎で行われた。聖母昇天祭の祝日にあたる 15 日（火）と土日を除く 9 日間、午前中 2 コマ、午後 1 コマのモジュールと呼ばれる授業を受講し、日によってフォーラムとアトリエにも参加した。

3 つのモジュールを受講し、フォーラムあるいはアトリエを合計 4 つ受講することが修了の条件である。登録方法や受講の仕組みについては、初日のガイダンスで詳細な説明があった。モジュールに関しては、事前に日本でインターネットを通して登録ができるのに対し（私は失念していたのだが、スタージュの事務担当の方がメールで尋ねてくださり、そのメールに受講希望モジュール名を返信することで事前登録をしてもらえた）、フォーラムとアトリエはスタージュ開始後の決められた日時に先着順で登録が行われた。ユゴーの生家訪問等の人気フォーラムは定員オーバーで参加することができず残念であった。また、アトリエを受講すると 1 週間のあいだ 15 時 30 分から 17 時まで 4 日間受講することになるので、フォーラムの多くと時間が重なってしまう。提供されるモジュールの時間割は事前にインターネットで調べることができるが、フォーラム、アトリエに関してはスタージュ初日のガイダンスで日程と内容が明らかになる。そのため短時間で選択、決定をすることになるので、過去の受講者の報告書をあらかじめ熟読し、特に受講したいフォーラムやアトリエの目星をつけておくとよいと思った。さらに、モジュールによって模擬授業が課せられたり、課題があったりと準備にかかる負担が異なる。かなりハードなスタージュなので、帰国後に燃え尽きないためにはその点も考慮して授業選択をする必要があるかもしれない。

2.　受講したモジュール・フォーラム・アトリエについて

私の受講したそれぞれのモジュール、フォーラム、アトリエは以下の通りである。

■Module de formation 1：8h30-10h00　合計 12 時間

« Enseigner la phonétique par le rythme et le mouvement » par Mme Régine Llorca

受講者と講師が輪になり、身体とリズムを使ってフランス語の発音やイントネーションを習得するためのさまざまなアクティビティーを行った。拍に合わせてリズムに乗って即興で作文をする活動もあり、語彙を必要とするため難易度は割と高い。また、発音の教え方について、綴り字と音の関係をまず覚えるという方法しか今まで頭になかったが、FLE においてはそういう教え方はしないらしい。講師は　« L'alphabet tue l'oreille » とおっしゃっていた。自分のフランス語の発音、および発音の教え方を問い直すよいきっかけとなった。

■Module de formation 2：10h30-12h00　2 週間で合計 12 時間

« Apprendre et enseigner avec la chanson francophone » par Nicole Poirié

各回で 3～4 曲のシャンソンを聴く。そして、それらのシャンソンを文法、語彙、発音、文化社会的側面等においていかにフランス語教育に活用することができるかを議論する部分と、講師による解説、シャンソンを使った授業の教案作成、その教案の発表から成る授業。授業の初めに、各受講者の授業でのシャンソン活用の経験について聞かれ、それに基づいて授業が進められた。候補曲のなかから好きな曲を選び教案作成をする際には、アルジェリア人のエコール・ノルマルの学生とペアになって作業をした。事前に知識があまりなくても、年代を追い、社会背景を含めてフランス語圏シャンソンの特徴と流れを解説してもらえたため、非常に興味深く、勉強になるモジュールだった。

■Module de formation 3：13h30-15h00　2 週間で合計 12 時間

« Apprendre et enseigner la grammaire autrement » par Jennifer Coronati

教師が文法の規則を一方的に学習者に説明したり単純な練習問題を繰り返させたりするのではなく、さまざまなゲームやアクティビティーを通して文法を学ばせようという趣旨の授業。遊戯性が強く、合う人と合わない人が如実に表れる方法だと感じ

た。また、実際それらのゲームやアクティビティーを行うために文法を知らないとできないものも多く、「文法を用いた」ゲームやアクティビティーの提案になっている点が気になった。既習事項の復習などの際に、部分的にこれらの方法を取り入れることは可能だと感じた。

■Atelier：15h30-17h00　　2 週目のみ 4 日間、合計 6 時間

« Cinéma et FLE » par Nicole Poirié

シャンソンの授業と同じ講師によるアトリエで、初回に授業における映画利用の経験について各受講者が話し、それに基づいて授業が進められた。1 日目に、映画を分析するための専門用語の解説が一通りあったため、予備知識がなくても参加できた。2 日目からは、*Tanguy* (2001), *Amélie* (2001), *Astérix et Obélix : Mission Cléopâtre* (2002), *Bienvenue chez les Ch'tis* (2008) を抜粋で観ながら、講師が実際に授業で用いているプリントを使って多様性に富んだ問題や質問に答えることで、映画を使った授業を体験した。受講者は計 4 名で、他の受講者（チェコ人、アルジェリア人、ケニア人）が早口の台詞でも一度で理解し質問に答えることができるのに対し、私は数回聞かないと全く聞き取れないこともあり、長くフランス語圏に留学したにも関わらず自然な話し言葉に不慣れなことを痛感した。また、現代の日本人学生に関して、映像に興味のある人は多いので、授業でうまく映画を活用することによる効果は大きいのではないかと思った。

■ フォーラム・教科書出版社によるプレゼンテーション

その他に、フォーラムとして Jean-Paul Tarby 氏による « Organisation et actualité du système éducatif français »、Alix Pelé 氏による « Découvrir la médiathèque du CLA et ses ressources »に参加し、FLE の教科書出版社 4 社によるプレゼンテーションを受けた。興味のある教科書を 3 部までサンプルとしてもらうことができる。

3. エクスカーションと « Soirée internationale »

スタージュ期間中は、バスでのエクスカーション（フライブルク、ディジョン&ボ

ーヌ、ドゥー河上流地方）や映画・演劇鑑賞会、カラオケパーティーと、全部は参加しきれないほどの文化的催しが開催される。エクスカーションは、スタージュ期間前にメールで登録できたり人数制限があったりするので、興味があるものには早めに登録するのがよい。

また、« Soirée internationale » はブザンソンの夏の風物詩のようで、スタージュの受講者や講師たちだけでなく町の人たちも参加する一大イベントだった。私たちは『雪女』の紙芝居を作成しプロジェクターで上映したが、連日長時間の授業を受け、その後に準備をするのは体力的にきつかった。参加する場合は、事前になるべく話し合いと作業を進めておいたほうがよい。各国の参加者には民族衣装を着用する人が多く、私も浴衣を着たところ思いのほか好評だったので、今後の参加者の方々にもぜひお勧めしたい。

4. おわりに

春のスタージュに続き、今回のブザンソン研修も自分のフランス語の教え方を見直す貴重な機会となった。世界中のフランス語教師と出会い、共にフランス語教育について議論するというかけがえのない体験もできた。このスタージュへの参加を可能にしてくださったすべてのみなさまへの心からの感謝を述べて筆を置きたい。ありがとうございました。

報告 8

ブザンソン研修報告

概要

報告者は 2017 年 7 月 31 日から 8 月 10 日の日程でのブザンソン研修に参加しました。出発前の諸手続きに関する日本側窓口は在日フランス大使館書籍・フランス語教育・フランコフォニー担当の萩尾英理子さんで、ブザンソン側からは Sécretariat du stage の Mme. Françoise Marting によるメールでの連絡が夕方にありました。内容としては宿泊先の詳細や受講を希望する Module の事前受付などでした。研修開始の前々日パリ・シャルル・ドゴール空港到着後は、事前に大使館より案内のあった空港内の Travelex にてパスポート提示の上で給費を受け取ります。パリ市内の指定ホテルで一泊後、リヨン駅で同日程の日本人研修生が合流し TGV に乗車しました。ブザンソンの Viotte 駅には CLA のブースが設けられていて、滞在先の Zenitude まで Tram で行く道順と翌日からの集合場所である大学までの道順の案内を受けました。初日のオリエンテーションでは CLA デザインのバッグに入った研修案内一式が配布され、研修の受講方法や臨時の学生証の発行についての案内を受けました。Tuteur としては講師でもある M. Olivry が日本人他、イラン人、イタリア人、リトアニア人、チェコ人、アゼルバイジャン人研修生を担当しました。緊急時に連絡できる電話番号や、フランシュ・コンテを代表する特産品としてチーズやワインの説明もこの時に受けました。

Module

報告者が受講した Module は以下のとおりです。研修生はいずれかの Module を各時間 1 つずつ選択の上登録します。数回受講後に Module を変更することもできるということで、研修生は各々の関心に合わせて選択し最適な時間割をとなるように考えます。報告者は朝から Accueil に詰めていた Mme. Hélène VANTHIER に希望内容を相談することができました。

Mme. Gelin Audrey, Enseigner la littérature en classe de français langue étrangère et seconde.
Mme. Crochot Françoise, Développer des stratégies de compréhension orale et écrite.
M. Frisa Jean-Marie, La société et la culture françaises aujourd'hui.

一つ目の Module はフランスの高校で習うレアリスム文学作品を中心に、現代の自伝的小説や BD または映画までを FLE に活用する方法論が紹介される内容で、４～５人のグループで Activité を行いました。フランスの教育制度の中にある文学やその翻案とフランス語学習を関連づける方法が多文化的な視点の下に示されていたことが興味深いだけでなく、今後のフランス語教育実践について希望を持てるものでした。２つ目は CEFR と FLE の実践とを結ぶ方法を示す内容で、研修生が 2 人組になって Activité を行いました。語学学習に用いるオーディオ機器やインターネット上にある教材の活用方法なども示す実践的な内容で、登録した Module の中では最も FLE らしい内容であると感じさせられた意味で、この研修を代表する Module であったと言えます。３つ目はフランス地図や人口統計、年間行事表を使ってフランスの社会と文化について提示された内容について、各国からの研修生が自国との違いについて議論しました。週末前に M. Frisa からはブザンソン郊外にある ChâteauFarine というショッピングセンターへ社会学者になったつもりで行って、旧市街とは違うこの街を見てもらいたいという案内があり、後日バスに乗って出掛けるということもありました。授業始まりには必ずポピュラー・ミュージックを映像と共に流しながら、受講生の名前と出身国を書かせた三角折の名札を各人に手渡して出席確認をしていて、貧困と就学の問題などの社会学のテーマで授業中自由に発言してもらうためのコミュニケーション手段として優れていて、午前中の Module が制度内を対象にしているのと対照的であり、三つの組み合わせが報告者にとって

は有意義なものであると感じました。
中庭に面した Accueil は朝から終日開いていて、研修生に向けた連絡の窓口として機能しています。Sécretariat du stage の Mme. Françoise Marting、Mme. Hélène VANTHIER とその Assistant の Jean Ruffié、Activités culturelles の Chaima Oubouseksou と Amélie Perardot のうちの何人かは必ずそこに詰めていて、気軽な相談相手となってくれた他、連絡役として授業中にやってくる頻度もかなり高かったように記憶しています。担当教員との連絡について、初日にメールアドレスの案内をする場合と最終日にその他のデータと共に配布する場合がありました。どの Module でも最終日には USB メモリを持参するようにという連絡があり、授業で提示した資料のデータを受け取りました。またこの Accueil ではミネラルウォーターを自由に飲めるようにボトルが設置されていました。またブザンソンやフランシュ・コンテ地方の観光情報に関する冊子や地図、フランス語教育関係の古本の配布、書店がテントを張って営業した日もありました。

Forums et Ateliers
報告者が受講した Forum は以下のとおりです。研修生はいずれかの Forum（１時間） Ateliers（３時間）を選択の上登録し、合計３時間以上受講することが求められました。フランスのラジオやテレビ番組を授業で活用する方法を関係者である教員や番組制作者から具体的に提示するものと、ブザンソン市内を代表する美術館を学芸員の案内を受けながら訪問するものを受講しました。どの Forum もそれぞれ趣向が凝らされた内容でした。
Mme. Gros Deborah, Apprendre et enseigner avec RFI Savoir.
M. Iris Kolly, Découvrir le musée du temps-Palais Granvelle, intervenant Extérieur.
Mme. Noémie Lafond, Découvrir le Fond Régional d'Art Contemporain de Franche-Comté/Cité des Arts, Intervenant Extérieur.
M. Richard Bossuet, Apprendre et enseigner avec TV5 Monde.

Activités culturelles
Module とそのあとの Forum または Atelier が終わった放課後や週末の Activités culturelles について、担当スタッフは Accueil で映画や旅行申込の受付を行う他、CLA 主催 fête の運営・進行なども受け持っていました。報告者は Forum で le musée du temps-Palais Granvelle を訪れましたが、その中庭は野外コンサートの会場でもありブザンソンの街の文化的中心地であることが伺われました。週末の Haut-Doubs への excursion は Doubs 県のスイス国境地域の歴史と自然を地方色豊かな昼食付きで楽しむものでした。

総括
日程は全体として天候にも恵まれ、夏の日差しの中で冷涼さを楽しめたと言えそうです。朝夕の冷え込みと日中の短い雨もまた印象的ではありました。最終日の Module 後には各チューターより CLA の Directrice である Mme. Frédérique PENILLA と Coordinatrice du stage である Mme. Hélène VANTHIER による署名の入った Attestation が授与され、誤記がないかの確認を求められました。その後各国から参加した研修生同士のスマートフォンによる記念撮影がありました。また Mme. VANTHIER からメールにてウェブ上での questionnaire への協力が呼びかけられ、研修生はブザンソン滞在全般や研修内容についての評価を回答しました。その後中庭での打ち上げパーティーが行われ、二週間の研修日程は終了しました。フランシュ・コンテ大学の CLA とブザンソンの街についての印象として、教員やスタッフの中には日本語や日本の文化について何かしら知っている人が多く、また街の書店には俳句や小説など日本文学の翻訳のコーナーなどが見られたのも印象に残りました。最後に、この研修全般に関わられた皆様にお礼申し上げたいと思います。